

# ミシェル・ド・セルトー 「〈神秘体〉あるいは 欠けた身体」 試訳

Traduction en japonais de 《*Corpus mysticum* ou le corps  
manquant》 de Michel de Certeau

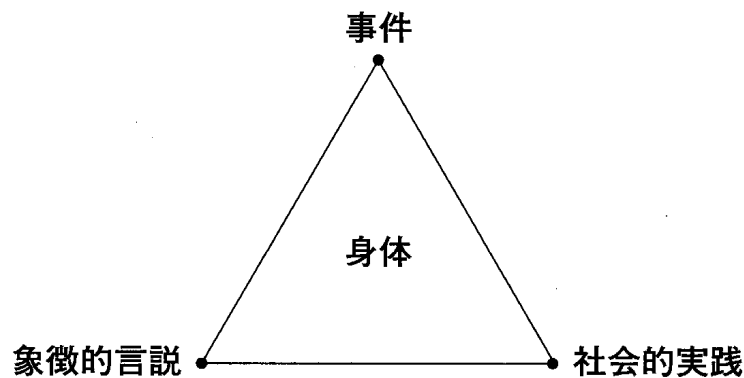
横山 安由美  
Ayumi YOKOYAMA

〈神秘体〉あるいは欠けた身体〔翻訳〕

「神秘的」*mystique*という語は中世の末頃に複雑な発展を遂げるのだが、それまでにもさまざまな道のを辿っていた<sup>1</sup>。中世の様相については、「神秘体」*corpus mysticum*という表現の行程を思い出せば十分であろう。神秘にかかわる諸事象の一つでしかないとはいえ、それは詳細な神学的な分析の対象として十分な価値をもつものであり、本書はそうした成果に負っている<sup>2</sup>。とりわけ、教義によって明確化されたこの「神秘体」は、それ自体が目的であるところの探索、つまり一つの身体の探求へと注意を引きつける。それはちょうど巡礼と同じように、消失によって特徴づけられた一つの場に向かう歩みの具体的目標を示すものである。(一つのロゴス、一つの神学など) 言説はあるのだが、それには社会的かつ／または個人的な「身体」が欠けている。教会を改革すること、共同体を築くこと、(霊的な)「生」を作ること、あるいは「栄光ある身体」を(再)準備することのいずれであるにせよ、一つの身体を生み出すことは神秘神学において本質的な役割を担っている。禁欲の闘いや予言者たちの隠逸など「身体」ないし「俗世」の拒絶として表れるものは、そこから精神に身体を与え、言説を「化体させ」、そして一つの真理を立ち上げる作

業が始まる一つの事実状態の必然的かつ予備的な発現にすぎない。見かけとは裏腹に、欠落は断絶をもたらす側（テキスト）にはなく、自らが「肉となる」側（身体）に、ある。「これは私のからだです」Hoc est corpus meumというこの中心的な「ロゴス」は、とある消失物を思い起こさせるとともに、また、とある何らかの実際の効果を想定させる。この言説を真剣に受け取る者たちは、身体の不在を苦しく思う者たちである。彼ら全てがいろいろなやり方で待ち望む「誕生」は、言葉において、一つの愛の身体を作り出すものでなくてはならない。そこから彼らの、お告げ〔受胎告知〕annonciationsの、化体する言葉の、耳による分娩の、探索が始まるのだ。

この探索は、答えがわかりきっているようにみえて実はずっと未解決のままのもう一つの問いにつながる。「体とは何か？」という問いである。神秘主義の言説には常にこの問いがまとわりつく。その言説が扱うのは身体の問題である。言説は身体の周囲をさまよい歩き、そしてついにそこに立ち入る暁には、あたかもヘブライ人たちが高らかにラッパを吹き鳴らしながらエリコの周りを練り歩き、そうして町がひとりでに扉を開いたのと同じように誇らしく立ち入ることだろう。身体はいまだ医学や工学の植民地になり下がっていなかった。この謎に満ちた源泉〔身体〕は、それぞれ移項し、異なったかかわりを有する三点からなる一つの中心という仮定モデルで表すことができるだろう。一点目は事件の極（不意に訪れる、苦悩や喜び、あるいは時間性を組み込むようなさまざまな認識）。二点目は象徴の極（意味あるいは本当の事柄を生み出す言説、物語、シーニュ〔徴〕など）。三点目は社会の極（「そこにいる」または「住んでいる」を成り立たせる、契約的な性質を帯びた意思疎通や実践のネットワーク）。この三角形の図式を示してみよう。



表出された経験の類型、その内容、それが指示する基本単位、その機能、そしてそれが指示するものに応じて、この3つの極をさまざまなレベルに分析することができるだろう。

	事 件	言 説	実 践
内 容	苦悩／享楽	意 味	意思疎通
基本単位	驚き (起きること)	シニフィアン (名づけること)	関係 (結びつけること)
機 能	歴史化	象徴化	社会化
指示するもの	時 間	真 実	場 所

身体の探求は、相や力点を変化させつつ、この三要素を組み替えていくことにほかならない。神秘神学は、文書として、身体シナリオを作る。そういう意味では、映画製作のようなものだ。

だが、キリスト教の体制下においてそれは、他の宗教への拙速な一般化をア・プリオリに排除する一つの偏見ないし公準にすっかりと統制されてしまっている。なるほどキリスト教は「ある身体喪失」の上に成立している。それはイエスの身体喪失であり、またそれは、イスラエルという「体」の喪失、つまり一つの「国家」およびその系譜の喪失によって裏打ちされている。なる

ほど始原的な消失である。ユダヤ民族を生物的・社会的現実のなかに根を下ろさせること、つまり神の選択によって他民族から隔てられ、歴史によって傷つけられ、聖書に刻み込まれた、現存し、明確であり、局地化された一つの身体に彼らを繋ぎとめることを請け負っていかなくてはならないという意味において、キリスト教という経験は特別扱いされるのである。民族的な起源や遺伝の系譜から切り離されているという意味においてのみ、キリスト教の言葉は「カトリック」catholique（普遍的）かつ「精霊降臨的」pentecostale（霊的）でありうるのである。ユダヤの伝承において、聖典は一つの生きた身体を書き、修正し、動かし続けてきた。その身体は聖典のもう一つのかたちであり、民族またはその成員たちの身体であった。それはまたいつか「医学的」にもなりうる伝承であった。キリスト教の伝統においては、原初的な身体の喪失こそが、まさにその不在の諸結果かつ代替物として、教会体、教義体、などの諸制度や諸言説を生み出し続けてきた。いかにして言葉を「体にする」のか。この疑問は、けして忘れ去ることのできない、「あなたはどこにいらっしゃるのですか？」という、絶望的な喪失の問いへとつながる。これが神秘主義者たちを駆り立ててゆく。

その問いはすでに福音書にあった。空っぽの墓の前にマグダラのマリアがやって来る。この人物は近代の神秘主義者たちの名祖である。彼女は言う、「彼らがあの方をどこに置いたのか、私にはわからないのです。」そして通りがかった人〔実はイエス〕に尋ねる、「あなたが、あの方を運んだのでしたら、どこに置いたのか教えてください<sup>3</sup>。」原始共同体そのものが生み出したともいえるこの請願は、一つの状況にとどまらない。マリアは使徒の言説を発したのである。ヨハネ福音書においてイエスが現れるのは、もう今はいないいくつかの歴史的な地、「私のいるところ<sup>4</sup>」としかイエスが言わない、どこだかわからない地においてでしか

ない。その結果、彼の「そこにいる」は、かつてここに「いた」こと、今はどこか手の届かぬところに「いる」こと、後に「戻ってくる」こと、のパラドクスとなる。その身体は、エクリチュールのように、散在することによって作り上げられる。それ以来信者たちは「あなたはどこにいらっしゃるのですか」と問い続け、そして何世紀にもわたって、過ぎゆく歴史に対して「それをどこに置いたのですか」と問い続けるのだった。他所から来た喧しい諸事件を契機に、あるいはキリスト教の言説が新たな経験の解釈学を体系化することで、あるいはまた共同体の実践がとある愛徳を現在化させることによって、やがて彼らは、欠けているがために求められる、一つの神秘体を「発明」するのだ。それは彼ら自身の身体でもあるだろう。

中世における「神秘体」概念の展開は、本書にとっても重要な一部分をなす。12世紀中葉以降、この表現はもはやかつてのように聖体を指し示さず、「教会」を指すこととなる。あべこべに、「真の体」*corpus verum*はもはや「教会」を指さず、「聖体」を指す。「神秘的」*mysticus*（隠された）と「真の」*verus*（本当の、現実の、そしてそのようなものとして認知可能な）という形容詞は互い入れ替わることとなる。そこでシニフィアンとシニフィエのキアスム〔交差配列〕という変化が生じる。（聖体という）シニフィエは他方のシニフィアンとなる。なるほど、新しい用例においては、「神秘的」*mysticum*は「神秘的に意味された」*mystice significatum*、「神秘的に示された」*mystice designatum*の短縮形でしかない<sup>5</sup>。キリストの社会的な「身体」である「教会」は、それ以降、目に見えるシニフィアンとしてとらえられた秘蹟の「身体」〔＝聖体〕の（隠された）シニフィエとなる。なぜならば、聖体は、聖別されたパンとぶどう酒という「形色」（ないし外見）のもとに現在するものの顕示であるのだから。このキアスムを契機に、全体が大きく揺れ動いてゆく。「神秘神学なるもの」« la » *mystique*

が成り立つ枠組みそのものにも関わることなので、この変化にきちんと言及しておく必要があるだろう。

### 1. 三角形から二点形へ

その神学上の変化はあまりにも明らかだった。これについてアンリ・ド・リュバックが著書『神秘体』 *Corpus mysticum*』を出しており、結論として次のように述べている。「互いに関連する […] 歴史的な身体、秘蹟的な身体、教会的な身体の三つの用語についていえば、かつて第一と第二の間に区切りがあったが、その後第二と第三の間で区切られるようになった。一連の秘蹟論の展開を司るのはまさにこの事実なのだ<sup>6</sup>。」教義上の句点の置き方が問題になっている。つまり、意味を決定づける、器をどこへ置くのか、と。区切りによって、「三（の身体）」が「二（の時間）」に分配される。三角形を二点形にするのだが、新旧の公式は全く異なる方法でそれを行う。その違いは、まさに三角形を二点形に組み直す仕方の差異そのものに対応している。二つの公式を次のようなかたちで解釈し直すことができるだろう。

記号論的には、古い公式は、秘蹟的なもの (S) と教会的なもの (E) を合接し (∧)、歴史的なもの (H) を離接する (∨) ので、以下のようなようになる。

歴史的なもの ∨ (秘蹟的なもの ∧ 教会的なもの)

あるいは略号を用い、「神秘」とされる部分をイタリック体で示すところなる。

H ∨ (S ∧ E)

(「キリストを拝領する」 *sumere Christum*) 秘蹟と (「キリス

トから受け入れられる」 sumi a Christo) 教会<sup>7</sup>は、「歴史的身体」(イエス)が示す「新奇なること」le kairos、つまり明白かつ唯一無二の「出来事」の、同時代的な実現として結び合わされる(しかも「共に与る」communio〔聖体拝領〕の語が両者に共通である)。したがって時間という観点で区切られており、アウグスティヌス的である。本来の出来事とその結果の表現とが区別され、後者は、一つの可視的な共同体または民族(*laos*)と、秘密の行為(*ergon*)または「神秘〔玄義〕」*mystère*の、「典礼的な」結合としての「教会—秘蹟」の相によって表される。なるほど、使徒による発祥(H)から現在の教会(E)に向けて進む直線的な流れ全体が、秘蹟(S)によって支えられている。その秘蹟は、「新奇なること」をその段階的な表れへといざなう、随所で制定的な、独自の作用(「神秘」ととらえられる。(HとSの)異なる時間が、同じ一つの不可視の「行為」によって一つにされる<sup>8</sup>。この図式は「伝統」の図式である。また多くの修道会においてこの図式が反復されている。それらは、創立者の死後(時間的な断絶)、彼の「霊」がその作品〔=修道会〕の発展の中において作用し続けると想定するからだ。だから神秘の語は仲介者的である。二つの時間の結合を可能にするのだ。それはそれらの分離を克服し(止揚し*aufheben*)、それらから一つの歴史を作る。「離接した二語を合接する第三の不在者は、それゆえ「神秘的」なのだ。」時間的な連続の仕組みを定めるのはこの第三者である。最終的には、以下の先後関係と

H *ant* E [Eよりも前のH]

以下の含意関係が生じる。

(H  $\wedge$  E)  $\supset$  S

ところが13世紀からは新しい公式が幅をきかせてゆく。そこでは使徒の権威（歴史的な身体）の実利性と秘蹟の権威（秘蹟的な身体）の実利性とが結び合わされ、それらが一体となって隠れた外延としての教会と離接される。以下の図式である。

$$(H \wedge S) \vee E$$

この新しい公式においては、その諸々の結果（E）の合算とのかかわりにおいて二つの機能（HとS）が区別されるのであって、古い公式のように、動的な公準（S）とのかかわりにおいて二つの時間（HとE）が区別されるのではない。時間的（または通時的）配置から機能的（または共時的）配置へのこの移行において、（HとSという）明らかな二語の客体化が生じる。一方では、「新奇なること」、つまり歴史的「身体」（H）が、その隠れた生産性を明らかにするような注釈を無限に築きあげて統御する一つの絶対的な記号体系(un Code)によく似た、一つの「コルプス〔体〕」corpusへと変化する。他方では、「神秘」つまり聖体は、別の見えない何かを意味する見える「もの」であるところのシーニュの哲学的な様式によってとらえ直される。この物体の可視性が、共同の儀式、共同体的な作用にとって代わり、そして教会の現実の生をかたちづくる（恩寵や救済などの）隠された効果の増殖をしるしづけてゆく。したがって、教会の身体をさらに「神秘的な」実効化と合算とへ向かわせる、一つは可読的な〔H〕、一つは可視的な〔S〕、二種の実利性を得ることとなる。神秘的な第三者〔E〕は指向されているにすぎない。それはいずれ（世に）生み出されるだろう。教会は改革されなくてはならないという意識の高まりとともに（14世紀から16世紀）、聖書という文書corpus scripturaire（H）と秘蹟的顕示（S）という権威ある二つの明白な「文書」という土台の上に、少しずつ、「きたるべき身体は神秘的になる」。



それゆえ、時間や現存についても異なった概念が現われる。「神秘的」の語の新しい位置づけもそれを示している。三つの身体の公式において、神秘的なるもの〔E〕は最後に来る（またしばしば終末論的な価値をもつ）。それはちょうど不可視的なるものが可視的なるものに対立し、終末が産出的な諸機能に対立し、総体が諸々の動的な装置〔器官〕に対立するように、実利性をもつ二語と対立する。それはまた別の時間とまた別の空間を示してくれる。それは、生み出すことの照準を、あるいは現在の指標の「かなたに」なされるであろう旅路を、意味する。それ以降、装置の可読的なコルプスおよび／または秘蹟の可視的なシーニュのおかげで、後に「新世界」〔アメリカ〕の発見ということがあるように、教会の神秘体が「発明」されることは必至であろう。この企ては宗教改革の企てである。やがてそれは徐々に、聖書のコルプスを特権化する一派（プロテスタント）と、秘蹟を特権化する一派（カトリック）の二つに分裂してゆく。（可視／不可視の）二点形が（歴史的、秘蹟的、教會的）身体の三角構造に勝ち優ってゆく。そこにあるのは

H vs E

または

S vs E

である。17世紀中葉までずっと、「神秘体」は可視的な諸現実との関係において他者であるという戦略的な地位を占め続けることだろう。それは階層的または聖書的な組成に「神秘的」空間を与えることであり、また、神秘的な諸体験に社会的またはテクスト的な可視性を付与することであったりする。改革の営みはこの境

界部分に力を集結させる。(イグナティウスやボルロメーオやベリユルの〔反宗教改革の〕抵抗など) 場合によっては、教会のヒエラルキーと神秘系修道会の類似性を取り上げることもある。だがいずれにせよ、目標は、一つの神秘体を作り出すことである。こうした問題意識から、神秘主義者たちはまた別の身体を発明する。それは宗教改革の言説から生まれた対自的な身体であり、科学的肉体とすることについては医学が「正しい」ことになってしまうような、また異質な身体なのである。

### 【解題】

上記は、ミシェル・ド・セルトー『神秘の寓話』(Michel de Certeau, *La fable mystique*, Gallimard, 1982)の第二部第3章「新しい知識」の第1節「<神秘体>あるいは欠けた身体」の一部の訳語である。第1節のうち序文と第一項「三角形から二点形へ」(pp.107-114)のみを訳している(第二項「可視的なものの戦略」と第三項「象徴主義 修辞と神学」は今後の課題としたい)。訳注は〔 〕に収めた。ヨーロッパに通底する神秘主義は、「語る主体」と「言葉」と「制度」の諸関係のまわりに組み立てられている。本書が中心的に扱うのは16世紀から17世紀であるが、中世の「神秘体」概念はあらゆる神秘主義的な発想の根本をかたちづくるものであり、ド・セルトーは独自の視点でこの問題を敷衍している。それが今回の訳出部分である。

「神秘主義」は「神・絶対者・存在そのものなど究極の实在になんらかの仕方で帰一融合できるという哲学・宗教上の立場」(『広辞苑』)と説明される。現実の事物から遊離した思考様式のようにとらえられがちであるが、ド・セルトーの言うとおりに、神秘主義ほど「身体」を問題視し続けた思想はない。(神であれ絶

対者であれ) (今ここに)「不在の何か」を (今ここに)「存在する何か」で表すという作業を考えてみよう。「語る(表す)主体」の形相をもつ「身体」というフィギュール以上に、「不在の何か」や「存在する何か」を表すのに適切なフィギュールがないことがわかるだろう。可視的で、諸器官をもちつつ統合的に働き、言動の主体たりうるという意味において、「身体」が本質的に「表象的」な性質をもつことは、古くから知られてきた。ピラミッドは亡き(無き)王の「身体」の外延的・物理的な構築物であった。人類の歴史は身体の表象の歴史といってもよく、そうして教権や王権や「世界の調和」は、「人体」に擬せられ続けてきた。聖書も法体系も一つの「コルプス」であった。

「象徴」*symbole*との違いから「神秘」*mystère* (本稿では便宜的かつ統一的に「神秘」と訳しておくことを断っておく)を説明しておこう。「鳩は平和を表す」「剣は暴力を表す」などの「象徴」は、「鳩」という一般概念と「平和」という一般概念が対応することを示すものであり、個別の鳩が直接に平和を引き出すわけではない。また象徴は、「意味」を指向する思考様式なので、「鳩」というシニフィアンが「平和」というシニフィエをもつと言うこともできる。容器と内容の関係でしかない。他方、「神秘」は「いま目の前に在る物によって、それとは異なった別のものを示すこと」であり、時空を凌駕する作用である。象徴の言説が「AはBを表す」であるなら、神秘の言説は「AはBである」である。単なる直喩と隠喩の違いではなく、後者は叙述の中においてAとBを一体化し、統合するのである。

ミサの聖体パンやローマ・カトリック教会は、イエス・キリストの身体を「表す」。初期キリスト教では、「教会」は(歴史的イエスの身体と歴史的継続性をもつという意味において)「真の体」*corpus verum*であり、「聖体〔パン〕」は「神秘体〔神秘的な体〕」*corpus mysticum*であった。ところが10世紀以降の聖餐論争におい

て、聖体パンがいかなる意味においてキリストの体なのかが議論された結果、聖体は形相と実体の双方において「真の体」だと表現することを余儀なくされた。そこで12世紀頃からは、聖体パンが「真の体」であり、代わりに「教会」が「神秘体」であるとする反転が生じ、ラテラノ公会議などで制度的に定められていった。

それは用語用例の変化にとどまらず、「神秘」なるものの射程や、表象としての「身体」の可能性を根本的に問う一つの状況であったことを本稿は暗示している。「個人」は自分の一つの「身体」を「もつ」に過ぎない。しかし「集団」は新しい「身体」を「創り」、それを社会の維持発展と関係づけてゆく。「ヨハネ」冒頭の「初めにことばがあった」は、言い換えれば「初めにはからだはなかった」であり、こうして「欠けた身体」からキリスト教の歴史という「コルプス」が始まってゆく。一つの「点」へと収斂させられた根源的な「身体の喪失」が、また放射線的にさまざまな創造の営為を生み出してゆく。「いかにして言葉を「体にする」のか」。人の言葉は、神の言葉のようなパフォーマンスな力をもたない。直接に物理的な作用を及ぼすことができない。だから「体とは何か」という問いを發し、「体」なるものを定めるところから始めないといけない。人の言葉が生み出す身体は本来的に表象的représentatifである。ド・セルトーは、「歴史化」と「象徴化」と「社会化」のせめぎあいの図式としてその生成のメカニズムを説明する。表象としての体は、時空の中に在り、時の流れにおいては可読的lisibleであり、空間の中においては可視的visibleである。体は一つのテキストであり、オブジェである。

また私たちは自らそれを読んだり、見たりすることを通して、人間の「創造」の妥当性を知的に検証してゆかなくてはならない。それは無限や永遠を引き出し、人間固有の豊かさを生み出すような「身体」なのか、それとも人を盲目かつ文盲にし、（誰かが／何かが）支配することを許容する「身体」なのか。とりわけ「イ

メージ」が支配する現代社会にあっては、三角形の頂点相互の関係が曰く言いがたいほどいびつになっているために、私たちは「見えるものが示す見えないもの」への注意を一瞬たりとも怠ってはならないのである。

---

#### 【原注】

- 1 Cf. SOPHRONE (« Le mot " mystique " », in *Revue pratique d'apologétique*, t.28, 1919, pp.547-556)およびLouis BOUYER (« Mystique, Essai sur l'histoire d'un mot », in *Supplément de la Vie spirituelle*, no.9, 15 mai 1949, pp.3-23)参照のこと。前者は形容詞形と名詞形の意味論的な差を指摘している(p.554)。その他、A.FONCK, art. « Mystique », in *DTC*, t.10/2, 1929, col.2599-2674;より限定された領域については Lucy TINSLEY, *The French expression for spirituality and devotion*, Washington (D.C.), Catholic Univ. of America Press, 1953.
- 2 Henri DE LUBAC, *Corpus mysticum*, Aubier, 2e éd., 1949.
- 3 「ヨハネ」20, 13 et 15。続く文言（イエスは彼女に言われた。「マリア。」彼女は振り向いて、「ラボニ〔先生〕」と言った。）は神秘的生の範疇に属するものである。
- 4 Cf. *Ibid.*, 7, 34 et 36 ; 12, 26 ; 14, 3 ; 17, 24 ; etc.
- 5 DE LUBAC, p.281.
- 6 *Ibid.*, p.288.
- 7 これらのアウグスティヌス的な表現は「〔キリストの〕身体」Corpsにおける二つの「集まり／与り」communionsをよく示している。キリスト（つまり聖体）を「費消し、食べ、受ける」行為と、キリスト（つまり教会）によって「費消され、受けとられ、同化される」行為である。
- 8 この観点は、sacramentum（「シーニュ」あるいは表象の問題性）というよりはむしろ、mysterium（「作用」の問題性）を強調する。ド・リュバックはまさに「古い意味における神秘un mystèreは、一つの物というよりは一つの行為である」と述べている。それは一つの「相互関係」(Simonin)であり、異なる諸語間の交換またはコミュニケーションの作用である(*Corpus mysticum*, pp.47-66)。